

人間がここまで、残酷で冷酷で無慈悲になれるものだろうか？

以前、〇〇教の知人で、どなたにでも親切で、贅沢を嫌い慎み深く 80 才を超えておられるにも関わらず、ユーモアがある方が、アウシュビッツでのユダヤ人虐殺について「なぜ、あのようなことが起こったか」といって、ユダヤ人は、〇〇教の主を裏切ったから」と話された。事実は知らないが人間への愛を説くはずの宗教でさえ、あのような恐ろしい行為を肯定するのかと思った。しかし、アウシュビッツへ行きその惨状を目の当たりにした時、惨たらしい行為を行なったのも、紛れもない人間であった。その残酷な行為も〇〇教を裏切った代償であると語るのも人間である。私自身の中にも、ある時は憎悪の中で誰かを殺め、口汚くののしり、それらはみな、行為として為されないだけで生じた思いは同じだ。また、強制収容所から朝、夜と収容所外に出、一般市民と出会ったであろう。

入所の際に、自動車やバスで到着する姿、毎日焼却された煙や臭いも近隣住民は異変を感じるには十分であったろうに、なぜ、疑いを抱かず、いや、異変を感じても日々の出来事の中の一つとして流していったのだろうか。私も見て見ぬふりをするならまだしも、無関心であることの方がどれだけ多いか。『夜と霧』の本の中で、「仕事に真価を発揮できなくとも、美や芸術を享受する機会に恵まれた生だけに意味があるのではない。それらを体験する機会が皆無の生にも意味があるのだ。生きることを意味のある可能性は、自分がかんじがらめに制限される中で、どのような覚悟をするか、まさに、その一点にかかっていた。」その箇所が胸に残った。しかし、レンガ作りの隙間だらけの小屋と土間、氷点下 20 度にも下がる板の間で、被る毛布さえなく、細長い便器に溢れた糞尿、凶悪犯の看守による冷酷な暴力、恐るべき人体実験、そのセンチメンタルな感情が如何に薄っぺらなものだったか。

今なお、行われているであろう闇にまぎれた暴力。この貴重な体験を得ることのできた私は、何ができるのだろうか。その事実とどうやって向き合えばよいのだろうか。小さな自分に捕らわれ、懲りずに自分とは？ともがいている。忘れてはいけない。私もまた、残酷な看守と同じ人間だということ。人に指さすほど、値打ちのある人間か。そして、アウシュビッツを見学させていただいてヤーマ・ニヤーマを実践していくことが私にできる唯一のことだと思う。

このような機会を頂いた木村先生、同行した皆さんに感謝します。

ありがとうございました。